

悠久の京を訪ねて Part V Vol.3



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

PartVでは、5回シリーズで8月16日から開催の第29回『小さな展覧会』より主な遺跡や遺物について紹介します。

女谷・荒坂横穴群の石棺

■横穴からみつかった石棺

八幡市女谷・荒坂横穴群の荒坂A34号横穴から石棺が見つかりました。横穴には木棺を入れるのが通例で、石棺が出土することは珍しく、京都府内では京田辺市堀切谷6号横穴から家形石棺が出土しているのみです。



見つかった石棺

石棺は、部材を横穴の中に運びこんで組み立てた後に遺体を納めたものです。石棺は10枚の板石を組み合わせたもので、棺として据えられた時期は7世紀前後です。石棺の内法は幅約60cm、長さ約90cm、高さ64cmの小さなもので、成人をそのまま納めることはできません。中には成人の手足の骨だけが残されていました。

■石棺へのこだわり

石棺の石材は、大阪府と奈良県の境にある二上山で採れる5～6世紀に王者の棺として切り出されていた凝灰岩です。奈良県烏土塚古墳や大阪府南塚古墳、京都府物集女車

女谷・荒坂横穴群



塚古墳など大型の古墳の石棺に使用されています。

女谷・荒坂横穴群の石棺は、それぞれの板石に溝を彫るなどあらかじめ組み合わせるための加工をしていますが、再加工した痕跡もあり、当初の設計通りには組み立てられていませんでした。別の古墳にあった大きな石棺の部材を抜き取り、寄せ集めて組み合わせたのでしょうか。石棺は全体が赤く塗られていたようで、赤色の顔料がみられます。表面を観察すると手斧や鑿などの工具で加工した跡が残り、石棺を作った石工集団の技術が相当高度なものであったことがうかがえます。多くの横穴で木棺を使っていた時代にあって他の古墳に納められていた石棺の部材入手し、組み立てたことは、この横穴の被葬者の性格や階層を考えると上での手がかりとなります。

この石棺の一部を展覧会で展示しています。ぜひ見に来て下さい。



石棺の石材には加工痕がよく残っています